筒井新聞　第 346 号（1）

病める牛たちの絵

2018 年 11 月 12 日　佐藤和宏・筒井哲郎

まえがき（筒井）

日本画家の戸田みどりさんは、放射線被ばくで病んでいる福島県の「希望の牧場」の牛たちの絵を多数描いておられ、展覧会に出品しておられたが、数か月後に画集出版の運びになった。戸田さんのアレンジによる原発に関する対話集会を相模原市で開いたことはすでにご報告した[1]。その関連で、もともと食肉用として育てられていた牛たちを生かして養っていくことの意味を考えさせられた[2]。

筆者・佐藤は、これまで様々なイベントのアートディレクターを務め、岩手県花巻市で毎年行われていた宮沢賢治記念祭の企画にも携わってきた。今回、賢治の作品に現れる生命体を念頭に「希望の牧場」の牛たちについて稿を起こした。

死にゆく牛を巡って

戸田みどりの日本画は"祈りと鎮魂"の連作であり、悲惨な事故をもたらした原発と理不尽な犠牲を強いるこの国の政策に真正面から対峙する静かな抵抗のメッセージを私たちに発信している。放射能に侵され病み・死んでゆく牛たち、それは被曝の地に帰還定住を余儀なくされた住民たちの、緩慢な放射線傷害の発症と死に至る姿を予見させるものだ。牛たちを凝視する作家の眼差しは優しくも厳しい。女性画家ならではの母性に満ちた強靭さなのかも知れない。

原爆の悲惨・非人間性を描き切った作品に丸木位里・赤松俊子夫妻の「原爆の図」がある。戸田みどりの日本画は「原発の図」として原発が人々と動植物の生命を犠牲にしたこの時代を長く証言し続けることだろう。「原爆の図」は酸鼻極まる地獄絵、それに比して「原発の図」は静謐で美しくさえある。しかし、その絵の前に佇んで牛たちの痛み・苦しみに目を凝らせば、見えず・臭わず・味もない放射能の本当の恐ろしさを思い知るに違いない。

共に日本画の伝統技法・画材によって描かれた"核"の悲劇をテーマとする「原爆の図」と「原発の図」。それは西洋技法の油絵では表せない日本的な感性・心情の発露としての

---

[1] 「相模原市での対話集会」『筒井新聞』第 343 号（1）
http://tsutsuinews.html.xdomain.jp/343/343-1.pdf

[2] 先行する書籍には次のものがある。
針谷勉『原発一揆～警戒区域で闘い続ける"ベコ屋"の記録』サイゾー、2012 年
真並恭介『牛と土　福島、3.11 その後。』集英社文庫、2018 年

絵画表現である。戸田みどりの作品は、私たちを命への慈しみに溢れた崇高な世界に誘ってくれる。その絵の前に立つものは最早傍観者では居られなくなるだろう。

なぜ、死に行く牛と共に生きるのか?

戸田作品のモチーフとなる病める牛たちは浪江町の「希望の牧場・ふくしま」に居る。明るい響きの牧場名だが、その実態は死と隣り合わせの「絶望の牧場」と呼ぶに相応しい。被曝して売れなくなった牛たちに商品価値はない。牛たちは家畜でもペットでもない。動物園にもなりえない。元々食肉に供されるために飼われていた牛たちを多大な負担を背負ってなぜ飼うのか？　なんのために生かし続けるのか？

原発事故前、牧畜の盛んだったこの地域では牛約 3,500 頭・豚約 30,000 頭が飼育されていた。事故発生とともにその過半数は放置されて餓死した。中には野生化したものもいた。行政からは一律に殺処分指示が出されたが、それに抗う飼い主たちの手で現在も近隣 13 の牧場で約 700 頭の牛が飼われている。一般社団法人「希望の牧場・ふくしま」で飼育されている牛は 360 頭。1 日約 5 ㌧の餌が必要だという。それでも牛たちを生かし続ける理由とは？

「希望の牧場・ふくしま」を描いたドキュメント『原発一揆』から牛たちを飼い続ける吉沢正巳氏の主張を抜粋してみる。

〇牛たちは原発事故後の福島の現実を示し続ける証拠・被曝被害の象徴である。

〇原発事故を生き抜いてきた牛たちは貴重な研究対象であり、取り組み次第では学術

的にも将来に資するはずだ。

〇命ある牛たちを、まともな手当て・検査・調査もせずにゴミのように打ち捨てることなどできない。

〇牛たちの有り様を刻一刻発信し真実と向き合い続けることが、ほんとうの福島復興につながってゆく。

〇この地域の牧畜の隆盛は、主に満州からの引揚者たちによってもたらされたもの。吉沢氏の父親は満州で"棄民"され、ようやく日本に帰還。ここは艱難辛苦の末、父親たちが開拓した土地であり、国策による三代に渡る"棄民"など受け入れるわけにいかない。

吉沢氏の強い意志・熱い思いには驚き、惹かれるが、それでも放射能に侵された死に行く牛たちの生涯を全うさせようという無償行為には、それだけでは納得のいかないものも残る。

視点を変え豊かな自然の恵みに育まれてきた日本人の精神風土、すなわち自然・生き物への慈しみ、そして畏れにメスを入れてみたい。

命を育み、命をいただく

被曝した牛たちと共生し、衰弱し死に瀕する牛を看取ることは、営利を求める事業としては割りに合わない。この取り組みが 7 年間も続いている。どうしてこんなことが出来るのだろうか。

「希望の牧場・ふくしま」代表・吉沢正巳さんの「満州での"棄民"に次ぐ福島の"棄民"など許さない」の主張からすれば、"棄牛"は"棄民"に通じるという信条に基づくというところまでは察しがつく。殺処分の指示を受けて「いま国は、私たちベコ屋に牛を殺せと言っています。国は殺処分とともに、原発被害の証拠を隠滅したいのでしょうが、私は絶対に殺処分には同意しません」「被ばくした牛たちは人間と同じか、それ以上の原発の犠牲者ではないでしょうか。これから十年、二十年と、彼らが生き続けることによって、この問題は長く語り継がれることになるでしょう。私の牧場の牛は原発事故の生きた証、絶望の中に灯る希望の光です。私はこれからも、牛たちを生かし続けます」と言っている[3]。

牛を交配させ・産まれた子牛をその腕に抱き、餌をたらふく食わせて立派な成牛に育て上げて送り出す。牛飼いは牛たちの運命を知りながら、限りある命の時を共に過ごす。手塩にかけた牛たちへの愛着は余人のはかり知れないところだろう。

牛に寄り添う牛飼いのように、現在は数少くなったマタギ(猟師)もまた、獲物への感謝と敬いの思いを受け継ぎ、入山や浄めの儀式を今も行っているという。アイヌ民族のイヨマンテ(熊送り祭)やキッネ信仰(お稲荷さん)などにみられるように、昔の日本には動物と

---

[3] 針谷勉『原発一揆』サイゾー、2012 年、p.121

人間とに魂の交流があったようだ。アイヌやかつて狩猟や炭焼きなどを生業としていた山の民″サンカ″、動物の屠殺や皮剥ぎ、埋葬など社会の″もの忌み″の部分を担ってきた″部落民″などが、動物たちの生殺与奪に深く関わり、動物たちを理解して慈しむ日本古来の″自然観・死生観″を受け継ぐ者たちであろう。

「熊。おれはてまえを憎くて殺したのでねえんだぞ。てめえも熊にうまれたが、因果ならおれもこんな商売が因果だ」と、宮澤賢治は「なめとこ山の熊」で、田畑を持たず職にもありつけない鉄砲の名人、ズングリムックリの小十郎に言わせている。一家七人を養うため、熊を撃ちまくり胆と毛皮を担いで山を下りるが、その姿はみるかげもないほどぐんなりしている。

狡猾な荒物屋に買い叩かれる胆や毛皮のために罪もない熊の命を奪う。葛藤する小十郎はいつの間にか熊の話がわかるようになり、母子熊や「二年待ってくれ」と命乞いする熊を見逃すようになった（熊は約束を守り二年後に小十郎の家の前で死ぬ)。冬になって狩猟の場を移した小十郎は、突然現れた熊を撃ち損じて逆に襲われてしまう。「お前を殺すつもりはなかった」という声を聞き、青い火を見た小十郎は死を悟り、「熊どもゆるせ」とつぶやいて落命する。三日後の夜、山の頂の冴えざえとした月明かりの下に車座にひれふす熊たちの姿が。小十郎の亡骸を囲むその大きな黒いものたちはずっと化石になったように動かなかった。

「法華経」を熱烈に信奉した宮澤賢治だが、「なめとこ山の熊」にはイスラム教を暗示する場面や、晩年の作品「銀河鉄道の夜」にはキリストらしき人物が登場するなど、宗派を超えた求道者の趣が強い。特に自らの命を差し出す「布施」や自己犠牲のテーマは童話などに繰り返し描かれている。これらには仏教の[ジャータカ](お釈迦さまの前世譚で、「捨身飼虎」の物語を含む)の影響が色濃く表れ、他の命を食べて生きるしかない人間の葛藤・苦悩が反映されている。

賢治の「よだかの星」もまた、生き物の生死の物語だ。夜だかは醜い容姿と不快な鳴き声ゆえに他の鳥たちから疎まれ、鷹からは「タカの名前を返上しなければつかみ殺してやる」と脅される。泣きながら夜空を飛び回り、大口いっぱいに虫を呑み込む夜だか。「ああ、たくさんの虫が毎晩僕にころされる。そのただ一つの僕がこんどは鷹に殺される。ああ、つらい、つらい、僕はもう虫をたべないで飢えて死のう。その前に鷹が僕を殺すだろう。いや、その前に、僕は遠くの遠くの空の向こうに行ってしまおう」。絶望した夜だかは夜の天空をどこまでも上昇してゆく。

> もう夜だかは落ちているのか、のぼっているのか、さかさになっているのか、上をむいているのかも、わかりませんでした。ただこころもちはやすらかに、その血のついた大きなくちばしは、横にまがっては居ましたが、たしかに少しわらって居りました。
>
> それからしばらくたって夜だかははっきりまなこをひらきました。そして自分のか

らだがいま燐の火のような青い美しい光になって、しずかに燃えているのを見ました。そして、よだかの星は燃えつづけました。いつまでもいつまでも燃えつづけました。今でもまだ燃えています。

「銀河鉄道の夜」のさそりの火もまた、命を捧げる自己犠牲の物語だ。少年ジョバンニとカンパネルラが旅する北十字から南十字まで数々の星座を巡る銀河鉄道は、生者と死者の世界を結ぶ冥界の交通機関のようだ。さまざまな人たちとの出会いと別れ。旅の後半に出現するのが赤く燃えあがる″さそり(アンタレス)″である。同行することになった少女が語りはじめる″さそり″の逸話―

むかし、荒野で一匹のさそりが小さな虫なんかを食べて生きていた。ある日さそりはいたちに食べられそうになって逃げ、井戸に落ちて溺れはじめた。「ああ、私は今までいくつの命をとったかわからない。どうしてわたしはわたしのからだを、だまっていたちにくれてやらなかったんだろ、そしたらいたちも一日生き延びただろうに。どうか神さま、こんなに空しく命をすてずに、この次はまことのみんなの幸せのためにおつかいください」。そしたらいつしかさそりはじぶんの体が真っ赤なうつくしい火になって燃え、よるのやみをてらしているのを見たって。

この逸話こそ「銀河鉄道の夜」のテーマであり、この未整理の童話は、そのテーマを受けるように「カンパネルラは川で溺れた友人を助けて流されてしまっていた」という自己犠牲のエピローグで終わる。

生き物は他の生き物の命を奪い食べることでしか生存出来ない。意識・感覚と知性を有する人間とて同じであり、そのことが業(ごう)や原罪といった苦悩の概念を産んだとも考えられる。宗教・宗派によって違いはあるものの、多くが「〇〇の肉は食べてはいけない」といった肉食のタブーがある。しかし、徹底した肉食(命を奪うこと)の否定を突き詰めていったら餓死をするか、己を食べ物として差し出すしかなくなるではないか。

あとがきー未来へのまなざし（筒井）

生命は、個体ごとのアイデンティティの存在証明である。そして、生命は親から子へ受け継がれていく。肉牛として生まれ育てられたものは、その目的を全うする使命があるというものだ。その目的を阻害されたときはどうあるべきか。人間でもケアを受けながら余生を全うするように、自然の呼び声に従って余生を生きるべきだ。

人間社会は、アイデンティを捨象して標準化された商品として処分することしか考えない。主人公の牛と、伴走する牛飼いは、生命を全うさせることを本能として要求する。この声に耳を傾けることが人々の共存、生命の共生の必要条件である。